

『哲学探究』の「原初的な言語」はなぜ「完全」なのか

溝越 大秦(大阪大学)

本発表では、ウィトゲンシュタイン著『哲学探究』(以下 PI)第2節(以下、節番号を§とアラビア数字にて指示する。)における、「完全で原初的な言語(英:complete primitive language, 独:vollständige primitive Sprache)」(以下 CPL) (PI §2)がなぜウィトゲンシュタインに「完全」と呼ばれるかを、主に Baker & Hacker(2009a,2009b)や Kripke(1982)を参照しながら論じる。

PI では、アウグスティヌス的な言語観、すなわち心的であれ行動主義的であれ(Baker & Hacker(2009a))、語と指示対象が存在する言語観に対する批判への準備としてCPLが登場する。その内容は「台石」、「柱石」、「板石」、「梁石」で表される石材を用いて大工が家を建てるものである。

CPLでは呼ばれる石材を用いてAとBが家を建て、Aが叫んだ語に相応しいという営みが行われている。Aが「柱石」と叫んでBが台石を持ってきた場合、AとBの間に齟齬が生じている。

CPLに習熟していない者には教育及び訓練が施され(PI §5)、習得者は同じ語でも教育内容によって異なった振る舞いや理解を示す(PI §6)。ウィトゲンシュタインはそこからアウグスティヌス的な言語観が言語活動の多様性を捉えきれていないと指摘する。

一方、CPLの扱いについて、鬼界(2003)の解釈ではCPLが言語として未発達なものとされている。他にも、丸田(2021)は、CPLは単純かつ明瞭であるけれども、その単純さが災いして機械的になってしまい、およそ人間的な言語活動とは言い難い部分があるという。Baker & Hacker(2009b)はCPLがAの叫びとBの運搬に依存していることから、構文や文構成の諸規則、抽象性や多様な対話機能の欠如を指摘し、チェスの簡略化のような形のモデルであるという点を強調している。これらの解釈だと、CPLは未発達であくまで単純化されたモデルに過ぎないのであり、文字通りの意味での完全さを持たない。

確かに、CPLが本当に「完全」であるなら、高度な言葉の応酬や詩的な世界の表現などがあってもおかしくない。その完全さは単純であって「完結している」からこそであると言うこともできよう。「完全な」という表現を用いるにあたって、不足部分があるのではないかという疑問を抱くことは至って自然である。

しかし、本発表はCPLが持つ「完全」さが否定されるべきではないと主張する。彼らは生身の人間であり、一定の規則にあらゆる側面から従いながら、あるいはその際にさまざまなことを思い出したり、苦痛を感じたりしながらCPLを遂行しているのではないか。そこにCPLがただ単純化されたモデルではなく文字通りの「完全」さを持つと発表者は主張する。

そこで、一般的には誤読とされるKripke(1982)の議論ももう一度焦点を当てたい。確かに、ウィトゲンシュタインの言語とその使用者である人間及び規則の関係について議論したKripkeの立場は、McGin(2006)の批判にもあるように、規則遵守の共同体説を徹底するあまりウィトゲンシュタインの立場からかけ離れているということが指摘される。

しかし、McGin(2006)も言語が持つ共同体的性格を全くもって否定するわけではない。ここで、Kripke(1982)の主張をCPLに置き換えるのであれば、少し説明しただけで正しい石を持ってきたり、多く説明しても、違う石を持ってきたりすることもあり得る。Kripke(1982)はPI29に言及しながら、言葉の定義について以下のように主

張する。言葉を定義する際、その定義の把握やその正しさが、定義が与えられる状況や与える人間に左右され、定義を与えられた人間の語の使用によって示される。

その点では、CPLは、人間の誤解や戸惑い、苦痛も想定し得る。Aの説明や指の向け方、目線などでBが把握する石材がAの必要とするものと食い違う可能性もある。あるいは、Bが疲労によって苦痛を伴うことも考え得る。CPLはその点において、規則遵守や人間的諸活動に依拠した、一つの「完全な」言語といえるところで本発表は結論づける。

参考文献

- Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell 2010
- G. P. Baker & P. M. S. Hacker, revised by P. M. S. Hacker, *Wittgenstein Understanding and Meaning: Part. I—Essays* (Wiley-Blackwell, 2009 (2009a))
- G. P. Baker & P. M. S. Hacker, revised by P. M. S. Hacker, *Wittgenstein Understanding and Meaning: Part II—Exegesis*, Wiley-Blackwell, 2009 (2009b)
- Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard University Press, 1982
- Colin McGinn, *Wittgenstein on Meaning, ASM Volume 1: An Interpretation and Evaluation*, Wiley-Blackwell, 2006
- 鬼界彰夫、『ウィトゲンシュタインはこう考えた——哲学的思考の全軌跡 1912-1951』, 講談社現代新書, 2003
- 丸田健, 「意味と理解—『哲学探究』の「ギャップ」に寄せて」, 『科学哲学』, 54巻, 1号, p. 1-27, 2021